

浅間牧場を主とした浅間高原の鳥類

山 田 勤¹

はじめに

群馬県北軽井沢の浅間牧場は、上信越高原国立公園内に位置し、浅間高原の中心的存在として、近年、観光地、保養地として開発が進んでいる。しかし、開発による自然環境の変化が、そこに生息する鳥類にどのような影響を与えているかの調査はほとんどおこなわれていない。そこで、浅間高原のなかで、浅間牧場に代表される高原地域での鳥類の生息状況を把握し、今後の環境の変化が鳥類に与える影響を知るための基礎資料を得る目的で調査を実施した。

調査地および調査方法

調査地の浅間牧場は浅間山（標高2560 m）の北東山麓に位置する波浪状の高原（標高1300 m）である。気候は、夏は冷涼で過ごしやすいが、冬は厳しく、最低気温が0℃以上になるのは6～9月の4カ月間のみである。

初雪は浅間山の初冠雪より1カ月ほど遅く、11月中旬にみられる。11～4月が降雪期だが、積雪量が50 cm以上になることはほとんどない。植生は、アカマツを主とした自然林とカラマツ人工林が優性で、灌木地ではズミ・ヤシヤブシ等が目立つ。調査は、これらの地域のほかに、イネ科を主とした牧草地、畜舎・人家周辺等の環境を含め1977～79年に実施した。センサスはロードサイドセンサス法により合計88回おこなった。

なお、調査成績の均一を図るため、次の条件をつけた。

1. 調査コースは既設の未舗装道路を利用し、その一定距離（3.0 Km）を調査区間として毎回同一コースとする。
2. 観察認知範囲は道路の左右25 mの空間とする。
3. 調査中は一定の歩行速度（2 Km/h）を維持し1回の調査時間は1時間30分とする。
4. 調査は晴天または薄曇りで風の無い日に実施し、雨天・降雪時および風の強い日は見落しが多くなるため中止する。
5. 調査時刻は、その日の日の出時刻より4時間の間に調査が終了するように実施する。
6. 記録対象は、観察認知範囲内に出現する全ての個体（S, V, Cの合計：Song, Visual, Call）とする。

1982年10月1日 受理

1. 〒371 群馬県前橋市高井町1-15-10. 群馬県支部

調 査 結 果

1. 鳥類相の概要

1977年4月から80年3月の調査で観察された鳥類は、14目32科83種であった(表1)。これらのうち本州で比較的少ない種類としてオオタカ・オオジシギ・ベニヒワ・ハギマシコ・オオマシコ・イスカがあげられる。またツグミの亜種であるハチジョウツグミも稀ではあるが観察された。オオタカは少数ながら周年生息し、繁殖が予想される。オオジシギは牧草地を中心に観察できた。ベニヒワは77年の冬、全国的に渡来数が多く各地で大群が観察され調査地でも100羽前後の群れがしばしみられた。しかし、78, 79年には少なく、厳冬期に数羽の群れが稀にみられたにすぎなかった。ハギマシコもベニヒワと同様な傾向がみられた。オオマシコは77年に稀に観察されたのみで、78, 79年にはみられなかった。イスカは冬期に少数が観察されたが、稀に冬期以外にもみられ、78年3月に繁殖を確認した。また、地域的ではあるが、その地域では比較的普通にみられる種類としてエゾビタキ・ベニマシコがあげられる。エゾビタキは秋の渡りの途中、9月下旬～10月上旬にかけて少数羽の群れが観察された。ベニマシコは冬期ごく普通に観察された。

つぎに、観察された83種を季節的移動により、留鳥・漂鳥・夏鳥・冬鳥・旅鳥に分類すると次のようであった。すなわち、留鳥21種(25.3%)・漂鳥26種(31.3%)・夏鳥18種(21.7%)・冬鳥15種(18.1%)・旅鳥3種(3.6%)であった。地理的な条件等により旅鳥は少数が観察されたのみだが、全体として渡り鳥が多く(62種・74.7%)、なかでも漂鳥の占める割合が大きい。83種のうち繁殖が確認または予想される種類は49種(59.0%)で、その内容は留鳥21種(42.9%)・漂鳥15種(30.6%)・夏鳥13種(26.5%)であった。即ち繁殖鳥は留鳥の全種、漂鳥の57.7%、夏鳥の72.2%であった。

2. 鳥類相の季節的变化

観察された種類数は、5・6月の繁殖期に最も多く48種を数え、その後徐々に減少したが渡りの時期である9月に少し増加がみられた。以後再び減少を続け、冬に最も少なく39種となるが、渡りの時期の3月には少し増加がみられた。また渡りの別ごとに種類数をみると、夏鳥は5・6月、漂鳥は8・9月、冬鳥は1・2月に最も多くの種が観察された(図1)。

一方、総生息密度は相対的に夏に高く、厳冬期の1～3月に低いが、年により増減のしかたに差異がみられた。しかし繁殖期の生息密度は78, 79年ともほぼ同じ値を示し、6.5～6.8羽/haであった。生息密度の増減のしかたを渡

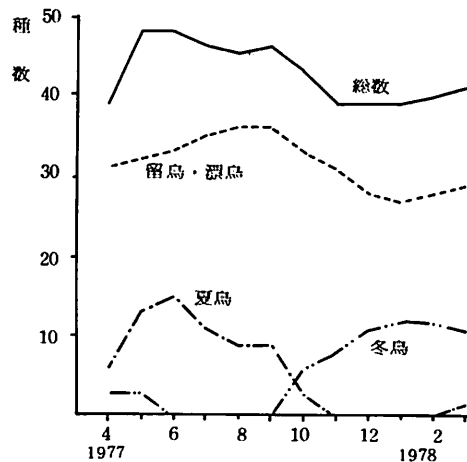


図1. 季節による種類数の変化

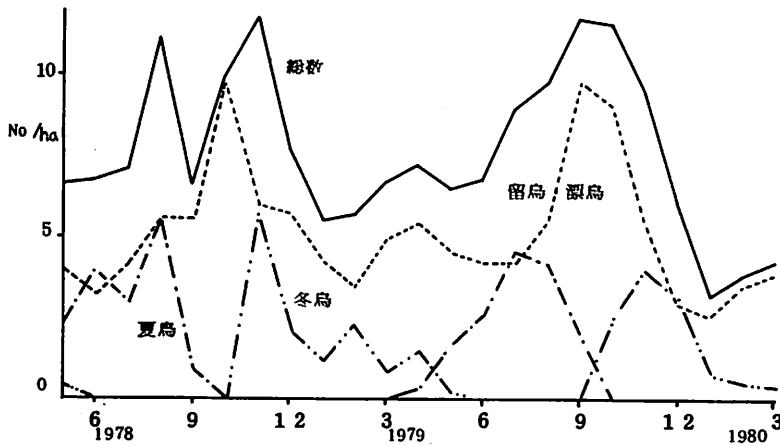


図2. 季節による生息密度の変化.

りの別ごとにみると、夏鳥では3月から徐々に増加し、種類数が最も多くなってから1～2カ月後に最高になり、その後急減した。渡鳥および留鳥も種類数と生息密度の関係は夏鳥と同様な傾向を示し、種類数が最高になってから生息密度が最高になった。しかし、冬鳥では渡来初期から高い生息密度を示し、その後徐々に減少し、生息密度が減少してから種類数が最も多くなった(図2)。

つぎに各月の優占種とその優占度をみると、季節の推移とともに変化がみられた。上位3種の合計優占度は50%前後で推移しているが夏と冬に高く、春と秋の渡りの季節に低い傾向がみられた。年による各月の上位優占種を比較すると、冬以外の各月はほぼ同様な内容だが、11～2月は年により構成種に相違がみられた。5～7月はイワツバメの優占度が目立って高いが、8月になるとツバメと逆転した。9月以後はシジュウカラ・ヒガラ・スズメ・ホオジロ等が目立つが、それらの優占度は高くなかった。

冬にツグミ・アトリ・カシラダカ等の優占度が高い月があるが、一時的で安定していなかった(図3)。

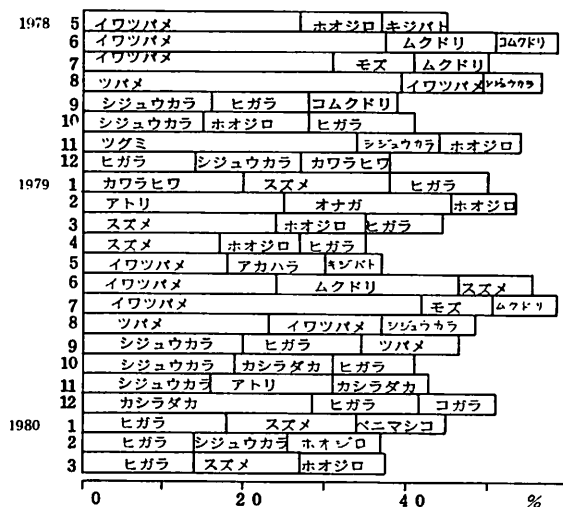


図3. 季節による優占種の構成.

考察とまとめ

今回の調査で83種を記録できたが、そのなかには県下では比較的少ないオオタカ・チョウゲンボウ・ウズラ・オオジシギ・エゾビタキ・ミヤマホオジロ・ベニヒワ・ハギマシコ・オオマシコ・イスカが含まれている、また、調査地で特徴的に多い種類としてウズラ・オオジシギ・カッコウ・ビンズイ・ノビタキ・アカハラ・ホオアカ・アオジ・ベニマシコ・コムドリがあげられる。

生息する種類数は春から夏に多く冬に少なかった。また、生息密度は季節の推移により大きく変動し、その増減の様子は年により相違がみられた。しかし、繁殖期の生息密度は一定で6.5~6.8羽/haであった。優占種およびその優占率が季節の推移とともに変化した、年による相違は少なかった。しかし、冬の上位優占種にはツグミ・アトリ・カシラダカなど大群をなして渡来する種があるためにその構成種および優占率に違いがみられた。

鳥類相とその季節的变化を概観すると、冬、ことに厳冬期に生息する種類は少なくまた数種を除いて生息密度も高くなく、優占種も不安定であった。したがって、調査地は越冬地としてより渡り鳥の一時的な休息地または集結地としての役割を持ち、また、夏鳥および漂鳥の繁殖地としての役割が大きいと思われた。また、調査地は人家集落からかなり距離を隔てているにもかかわらず、スズメ・ムクドリ・キジバトなど人的環境に依存度の高い種類の生息密度が比較的高いこと、また、高原特有のウズラ・オオジシギ・ビンズイ・ノビタキ・ホオアカなどが人工的な草原である牧草地に多く生息・繁殖していることは興味ある現象である。今後の環境の変化がこれらの種にどのような影響を与えるのか調査の必要があろう。

要 約

群馬県北軽井沢の浅間牧場で鳥相調査を実施した。その結果、14目32科83種を確認できた。種類数は春夏に多く冬に少なかった。また、生息密度は季節の推移により大きく変動し、年により若干の相違がみられたが、繁殖期の生息密度はほぼ一定であった。優占種およびその優占度も季節の推移により変化した、年による相違は少なかった。しかし、冬の上位優占種およびその優占度は不安定であった。このことから、調査地は、渡り鳥の一時的な休息地、集結地として、また、夏鳥および漂鳥の繁殖地としての役割を持つと思われた。

The Bird Survey on Asama Plateau

Tsutomu Yamada

On Asama Plateau, Karuizawa, Gumma Prefecture, 83 species of birds were recorded from 1977 to 1979. More species were present in spring and summer than in winter.

1-15-10 Takai-cho, Maebashi-shi 371